第十七講　物語・小説の読解⑥

Step 1

一　次の文章を読んで、1～5の問いに答えなさい。

旧家の長男である斎藤元司（もとじ）は、江戸で学問を修めることを父に願い出て、ようやく許された。

「ありがとうございます」
と元司は言った。
「母には、私の口からは言えませんので、うまく言ってください」
「納得させるまで、ひと苦労だの」
「そのかわりに、勉強させて頂くことは決してむだにはしません。必ずひとかど*の者になって戻ります」
父親の書斎から自分の部屋に帰るとき、元司は足が躍るような気がした。部屋に入って行燈*（あんどん）に灯を入れると、元司は障子（しょうじ）を開いて外を見た。
火鉢の炭火であたたまっていた部屋の中に、冷たい空気が流れこんできたが、元司の頬（ほお）のほてりはおさまらなかった。部屋のあかりが照らし出す外の闇を横切って、雪が流れるように降りしきっている。元司は膝（ひざ）を抱いて夜の雪を眺めた。
――家を離れることを、父は許している。
それを確かめた喜びが、元司の胸をふくらませていた。最初の江戸遊学*のとき、父との間に暗黙の諒解*（りょうかい）がついた時期があった

が、それは弟熊次郎の死でご*破算になった。だがここまできて、父はようやく再びおれを手ばなす気になったのだ、と思った。

雪が降りしきる暗黒のむこうに、ひろびろとひろがる野をみる気がした。そこに解きはなされる自分を感じた。

だが、その喜びの中に、微(かす)かに痛みを胸に伝えるものが含まれていることも事実だった。父と母を悲しませ、それでもこうして外に自分を駆りたてるものは何なのか、という思いだった。

――精いっぱい生きたいということか。

芽は単純に学問に対する好奇心のようなものだったと思う。だが、だんだんに家の中で書物を読むだけの境遇にあきたらず、家業を*いとい、心はしきりに外にむかうようになったのだ。家にいると落ちつかず、気分がいら立った。そして諸国の風物に触れたり、一歩ずつ学問を深めながら、師や友人とまじわっているとき、元司は心がのびやかに働き、身体もいきいきと動くようだったのだ。

――結局はそういうことだ。一人の人間として、自由に生きたいためにあがいてきた。

旧家の血は重く、それを継ぐ者は、一人の人間であるよりは家系の守護者としての役割を強いられるのだ。父が言ったように、家業を繁昌(はんじょう)させ、次の時代の者に血を伝え、そして朽ちる。あたえられる自由は少ない。

祖父も父も、当然の義務としてその役割を果し、自分をおさえ、わずかな自由に甘んじてきたのだ。そう思うと、熊次郎が死んで元司が帰郷したとき、待っていたように諸国見物に出て行った父の気持も、また家を継ぐことから逃げている元司に対する、父のいら立ちもよくわかるようであった。

父は俳諧に凝っているが、元司は日ごろ、さほどうまいとは思っていない。だがそのつたなさを笑ってはいけないのだ、と元司は思った。父は父で、すでに決められた枠の中で、精いっぱい自由でありたいと思ってしていることなのだ。そしてそれが、古い家系の守護者としての、あるべき姿勢なのだろう。

――おれは家系に対する反逆者か。

元司はそう思った。祖父や父は、古い血の重圧に堪(た)えて、つつましい生き方を選んだ。だがその重さに畏敬(いけい)を感じるよりも、反発を感じる者も出るのだ。それがおれだ、と元司は思った。

おそらくそれが古い血自身の宿命なのだ。そういう反逆者は前にもいたかも知れないし、かりに自分がおとなしく家業を継いだとして

も、その後にもそういう人間は出るかも知れない。古い血自身が、その古さのために自分にむかって反逆をくわだてるのだ。多分それがおれだ。

そう思ってみると、自分が外に出ると心も身体もいきいきとしてくるのは、古い血が新しい生き方をもとめているようにも思えてくるのだった。

（藤沢周平「回天の門」より）

【注】

＊ひとかど……ひときわすぐれていること

＊行燈……昔の照明具

＊遊学……故郷を離れ、よその土地に行って勉強すること

＊諒解……事情をわかって承知すること

＊ご破算……今までやってきたことを、最初の状態に戻すこと

＊いとい……いやがって

1　元司の頬のほてりはおさまらなかったの文節の数を書きなさい。

2　足が躍るような気がしたとあるが、このときの元司の心情を説明したものとして最も適切なものを、次のア～エから一つ選んで記号を書きなさい。

ア　自分のことよりも子の幸福を願う父の姿を見て感動している。
イ　弟の分までしっかり親孝行をしようと心に固く誓っている。
ウ　自分の願いがかない、将来への期待で気持ちが高ぶっている。
エ　母に事情を説明する必要がなくなり、内心ほっとしている。

3　微かに～含まれているとあるが、その理由を、解答欄にしたがって二十五字以内で書きなさい。

（　　　　）にもかかわらず父と母を悲しませることになるから

4　元司から見た祖父や父の生き方を次のようにまとめた。〔A〕〔B〕に当てはまる語句を、〔A〕には八字で、〔B〕には六字で、本文中からそれぞれ抜き書きしなさい。

〔A〕としての宿命を受け入れ、〔B〕でもよいとする生き方

A（　　　　　　　　）

B（　　　　　　）

5 新しい生き方とあるが、どのように生きることか。解答欄にしたがって二十五字以内で書きなさい。

古い血の重圧があるからこそ
□□□□□□□□□□□□□□□□
□□□□□□□□□□
生きること

【秋田県】

Step 2・3

二　次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

一夜の①<u>木枯らし</u>にざくろの葉は散りつくした。

その葉は、ざくろの木の下の土を円く残して、そのまわりに落ちていた。

雨戸をあけたきみ子は、ざくろの木が裸になったのにも驚いたが、葉がきれいな円を描いて落ちているのも不思議だった。風に散り乱れそうなものだった。

梢(こずえ)にみごとな果実があった。

「おかあさん、ざくろの実。」と、きみ子は母を呼んだ。「ほんとうに……。忘れていた。」と、母はちょっと見ただけで、また台所へもどって行った。

忘れていたという言葉から、きみ子は自分達(じぶんたち)のさびしさを思い出した。1<u>縁先になっているざくろの実も忘れて暮らしているのだった</u>。

半月ばかり前のこと――いとこの子供が遊びに来ると、早速ざくろに目をつけた。七歳の男の子が我武者に木を登るのに、きみ子は生き生きしたものを感じて、「まだ上に大きいのがあるわよう。」と、縁から言った。「うん、だって、取ったら、僕おりられないよう。」なるほど、両手にざくろを持っては、木からおりられない。きみ子は笑い出した。子供が非常に可愛(かわい)かった。

子供が来るまで、この家ではざくろの実を忘れていた。それからまた今朝まで、ざくろの実を忘れていた。

子供の来た時は、まだ葉のあいだにかくれていたが、今朝はざくろの実が空にあらわれていた。このざくろの実も、落葉に円くかこまれた庭土も、凛(りん)と強くて、きみ子は庭に出ると、竹竿(たけざお)でざくろの実を取った。熟し切っていた。盛り上がる実の力で張り裂けるように割れていた。縁に置くと、粒々が日に光り、日の光は粒々を透き通った。

きみ子はざくろにすまなかったように思った。

ざくろの実

二階に上って、さっさと縫物をしていると、十時頃、啓吉の声が聞こえた。木戸があいていたか、2いきなり庭の方へ廻(まわ)ったらしく、気負い立った早口だった。「きみ子、きみ子、啓ちゃんが来たよ。」と、母が大声に呼んだ。あわてて糸の抜けた針をきみ子は針山に刺した。「きみ子もね、啓ちゃんが出征する前に、一度会いたいって言い言いしてたんだけど、こちらからはちょっと行きにくいし、啓ちゃんもなかなか来てくれないしね。まあまあ今日は……。」と、母が言っている。昼飯でもと引きとめるが、啓吉は急ぐらしい。「困ったわねえ。……これうちのざくろ、おあがり。」そうしてまたきみ子を呼んだ。

きみ子がおりて行くと、啓吉は眼(め)で迎えるように、その眼は待ち切れぬように、きみ子を見ているので、きみ子は足がすくんだ。

啓吉の眼にふとあたたかいものが浮かびかかった時、「あっ。」と、啓吉はざくろを落とした。

二人は顔を見合わせて微笑した。

微笑し合ったことに気がつくと、きみ子は頬が熱くなった。啓吉も急に縁側から腰をあげて、「きみちゃんも、体に気をつけてね。」「啓吉さんこそ……。」と、きみ子が言った時は、もう啓吉はきみ子に横を向けて、母にあいさつをしていた。

啓吉が出て行ってからも、きみ子がちょっと庭の木戸の方を見送っていると、「啓ちゃんもあわてものだねえ。勿体(もったい)ない、こんなおいしいざくろを……。」と、母は言った。縁側に胸をあてて手を伸ばすと、ざくろを拾った。

さっき啓吉は、眼の色があたたかくなりかかった時、自分で気づかずに手を動かして、ざくろを二つに割ろうとしたはずみに、取り落としたのだったろう。割れ切らないで、実の方をうつ伏せに落ちていた。

母はそのざくろを台所で洗って来て、「きみ子。」と差し出した。「いやよ、きたない。」顔をしかめて、身をひいたが、ぱっと頬が熱くなると、きみ子はまごついて、②素直に受け取った。

上の方の粒々を少し啓吉が齧(かじ)ったらしかった。母がそこにいるので、きみ子は食べないと尚(なお)変だった。なにげない風に歯をあてた。ざくろの酸味が歯にしみた。それが腹の底にしみるような3悲しいよろこびを、きみ子は感じた。

そんなきみ子に母は、一向③無頓着で、もう立ち上がっていた。鏡台の前を通って、「おやおや、大変な頭。こんな頭で、啓ちゃんを見送って、悪かったわね。」と、そこに坐(すわ)った。

[A] きみ子はじっと櫛(くし)の音を聞いていた。「お父さんが、なくなった当座はねえ。」と、母はゆっくり言った。「髪を梳(す)くのが、こわくっ

て……。髪を梳いてると、つい、ぼんやりしちゃうのね。ふっと、やっぱりお父さんが、梳き終わるのを待ってらっしゃるような、そんな気がしてね、はっとしたりすることがあってね。」

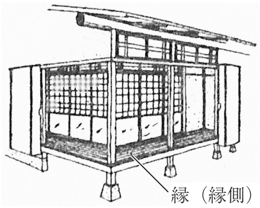
母がよく父の残しものを食べていたのを、きみ子は思い出した。きみ子はせつない気持ちがこみあげて来た。泣きそうな幸福であった。母はただ勿体ないと思っただけで、今もただそれだけのことで、ざくろをきみ子にくれたのだろう。母はそういう暮らしをして来たので、つい習わしが出たのだろう。きみ子は、秘密のよろこびに触れた自分が、母に恥ずかしかった。

しかし、啓吉に知られないで、心いっぱいの別れ方をしたように思い、また、いつまでも啓吉を待っていられそうに思うのだった。

そっと母の方を見ると、鏡台を隔てる障子にも、日がさしていた。膝に持ったざくろに歯をあてることなど、もうきみ子には恐ろしいようだった。

（川端康成「ざくろ」より）

（注）ざくろ＝植物の名。果実は熟すと裂け、粒状の中身が露出する。
縁＝和風建築で部屋の外側に付けた板張りの床の部分。縁側ともいう。
我武者＝勢い任せに激しい行動をすること。
凜＝きりっと引き締まっているさま。
出征＝軍隊の一員として戦地に行くこと。



Step 2

1　①～③の漢字の読みを書きなさい。

①　□らし　②　□　③　□

Step 2

2　1　縁先になっているざくろの実も忘れて暮らしているのだったとあるが、これはきみ子たちのどのような暮らしを表現していますか。
次のア～エの中から最も適切なものを選び、その記号を書きなさい。

ア　満ち足りた暮らし　イ　華やかな暮らし　ウ　活気のない暮らし　エ　気ままな暮らし

□

Step 3

3　2　いきなり庭の方へ廻ったらしく、気負い立った早口だったとあるが、啓吉がこのようにしてきみ子の家を訪れたのはなぜですか。
その理由について述べた次の文の空欄Ⅰにあてはまる適切な表現を、十五字以内で書きなさい。

出征する前に、（　Ⅰ　）と思っていたから。

□□□□□□□□□□□□□□□

Step 3

4

3　悲しいよろこびとあるが、この描写について、国語の時間に生徒が次のような話合いをしました。空欄Ⅱ・Ⅳにあてはまる適切な表現を、空欄Ⅱは十字以内、空欄Ⅳは二十字以内で書きなさい。また、空欄Ⅲにあてはまる最も適切な表現を、あとのア～エの中から選び、その記号を書きなさい。

山田：私は「悲しいよろこび」という描写がよく分からなかったんだけど、これはきみ子のどんな気持ちを表しているのかな。
青木：よろこびでありつつも、同時に悲しいものでもあるというような複雑な気持ちなんだろうね。どんなことに対して、悲しいと感じたり、よろこびを感じたりしているんだろう。
西川：啓吉の残したざくろに歯をあてたことから感じている気持ちだから、啓吉に関係があることじゃないかな。
青木：きみ子は啓吉に好意を寄せているんだよね。だから……。
山田：ちょっと待って。きみ子が啓吉に好意を寄せているというのはどこから分かるの？
西川：それは、啓吉と微笑し合ったときや、母親から啓吉の残したざくろを差し出されたときに（Ⅱ）ことから分かるよ。
山田：なるほど。好意を寄せている啓吉に関わるよろこびや悲しみと考えたらいいんだね。そうすると「悲しいよろこび」というのは、（Ⅲ）に対するよろこびでありつつも、同時に（Ⅳ）に対する悲しい気持ちでもあるんだね。

ア　啓吉の残したざくろがおいしかったこと
イ　啓吉と言葉を交わすことができたこと
ウ　啓吉に自分の気持ちを伝えられたこと
エ　啓吉に触れることができた気がしたこと

Ⅱ

Ⅲ

Ⅳ

Step 3

5 次の文は、段落Ａ以降の展開について述べたものです。空欄Ⅴ・Ⅵにあてはまる語句の組み合わせとして最も適切なものを、あとのア～エの中から選び、その記号を書きなさい。

母の発言を聞いたきみ子は、母がよく父の残しものを食べていたということを思い出し、そこから（Ⅴ）に（Ⅵ）を重ね、様々な思いを抱くに至っている。

ア Ⅴ 自分と母 Ⅵ ざくろと櫛
イ Ⅴ 母とざくろ Ⅵ 自分と櫛
ウ Ⅴ 母と父 Ⅵ 自分と啓吉
エ Ⅴ 自分と父 Ⅵ 啓吉と母

［　　］【広島県】

〈Note〉

第十七講 物語・小説の読解⑥

Step 1

一

解答

1、四　2、ウ　3、外に自分を駆り立てるものは何なのかわからない（にもかかわらず父と母を悲しませることになるから）（22字）（同意可）　4、A、古い家系の守護者　B、わずかな自由　5、（古い血の重圧があるからこそ）反発を感じて、一人の人間として精いっぱい自由に（生きること）（23字）（同意可）

解説

1、文節で区切ると、「元司の／頬の／ほてりは／おさまらなかった」となる。

2、自分の部屋へ入ってから、「家を離れることを…胸をふくらませていた」ことに着目する。

3、直後の「父と母を悲しませ…という思いだった」に注目。

4、A、旧家の血を継いだ者は、「家系の守護者としての役割」を強いられることをおさえる。B、「家系の守護者」となった祖父と父について、「祖父も父も…甘んじてきた」とある。

5、「古い血の重圧」とあるので、「祖父や父は、古い血の重圧に堪えて…生き方を選んだ」に着目する。それに対して元司は、「だがその重さに…それがおれだ」と思い、「精いっぱい生きたい」「一人の人間として、自由に生きたい」と考えていることをおさえる。

Step 2・3

二

解答

1、①こが(らし)　②すなお　③むとんちゃく(または、むとんじゃく)　2、ウ　3、どうしてもきみ子に会いたい（13字）（同意可）　4、Ⅱ、頬が熱くなった（同意可）　Ⅲ、エ　Ⅳ、啓吉と別れなければならなかったこと（17字）（同意可）　5、ウ

解説

2、「忘れていた」ということは、ざくろの実をとって食べることもない生活を表している。前の文に「忘れていたという言葉から、きみ子は自分達のさびしさを思い出した」とある。

3、「いきなり庭の方へ廻った」ということは、玄関で案内を乞う手間を省くほど急いでいる気持ちを表している。啓吉が出征すること、啓吉が「待ち切れぬ」ような眼できみ子を見ていることから考える。

4、Ⅱ、「微笑し合ったことに気がつくと…熱くなった」とあることや、啓吉の残したざくろを差し出されたときに「顔をしかめて…熱くなると」とあることをおさえる。Ⅲ、ざくろは好意を寄せている啓吉が触れたものであり、きみ子にとって啓吉そのものを表していることをおさえる。Ⅳ、もう啓吉は去っていっており、啓吉は出征して帰ってくるかどうか分からないということを踏まえて考える。

5、きみ子は「母がよく父の残しものを食べていた」ということに、「啓吉に知られないで、心いっぱいの別れ方をした」と思える自分の姿を重ね合わせている。